

カムパネルラ

～カムパネルラとは～
宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』でジョバンニと旅をする友人なのは言うまでもありません。絵本が開く異世界への道案内人としての意味を込めたものです。

Vol.17 2010年7月号

- 人の頭は、不思議な力をもっていた・・・吉川 和夫
- 自転車に乗る・・・藤田 博
- たいせつなこと・・・齋藤 広大
- 思い込みから自由でいることの大切さを教えてくれるこの一冊・・・奈良 友梨恵
- 新刊紹介・・・藤田 博

人の頭は、不思議な力をもっていた

吉川 和夫

ちょっと風変わりな絵本をご紹介します。



「おれは歌だ」。え？あなた「歌」なんですか？「歌」が自分のことを「おれ」とか言うわけ？「おれはここを歩く」。いや、あなたが歩くのは構わないけど、「歌が歩く」ってどういうことですか。歌は、教わって歌ったり聞いたりするもので、「おれは」とか「歩く」とかそういうものじゃないのでは？「おれは歌だ おれはここを歩く」。いや、待てよ、何だかあなたは「歌」のような気がしてきたぞ。それに、そう、いま歩いてみましょう。歩いているあなたが見えたような気がしましたよ...あれ？いつの間にあんなに遠くへ...おおい！ちょっと待ってくださいよ！

...妄想してしまいました。どうも失礼。ご紹介するのは、アメリカ・インディアンの詩による絵本です。西部劇を見たことがあるかしら。白人の保安官だか幌馬車だかに、奇声をあげながら襲いかかってくる「悪い奴ら」、これが少し前まで「インディアン」に与えられていたイメージでした。いわば「開拓を妨害する野蛮人」ですが、インディアンから見れば、白人こそ「自分たちの文化を破壊しにやってきた侵略者」だったでしょう。しかし、実際の先住民たちは、実に多彩な文化を持っていたことがわかってきました。かれらは、多様な生活様式のもとで北米、南米全土に住み、言語の種類は千以上に及ぶそうです。そして、身体的特徴がアジア的で、何万年も遡ればわたしたちアジア人と同じ祖先を持つ可能性も指摘されています。

インディアンあるいはネイティブ・アメリカンは、文字をもちませんでした。ですから、詩はすべて口承で伝えられました。大切なものでなければ忘れられてしまうでしょう。民族が口伝で守ってきたのは、創世神話、儀式、雨乞い、病気治療、悪魔祓い、狩猟など、生きるのに必要なものばかりでした。ことばには、「意味」だけでなく「音」があります。ことばの「音」が持つ力を、いまよりもっと、むかしの人々は信じていました。呪文は唱えられることによって「超言語」となり、ものごとを動かすのです。しかし残念なことに「音」は、紙に記録された瞬間に消えてしまいます。かれらのことばの「音」がもたらした力を知るすべはありません。それでもなお、金関寿夫氏の優れた訳業は、氏自身が伝承の鎖になろうとするかのような情熱によって、比類のない世界観を伝えています。



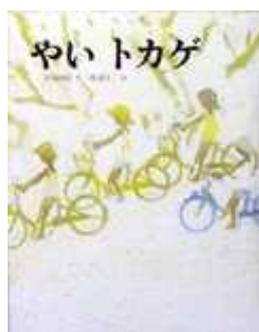
「黒い七面鳥が 東の方で尾をひろげる するとその美しい尖端が 白い夜明けになる」(「夜明けの歌」)
「ずっとずっと大昔 人と動物がともに この世に住んでいたとき なりたいとおもえば 人が 動物になれたし 動物が 人にもなれた。だから ときには 人だったり、ときには 動物だったり、たがいに 区別はなかったのだ。」(「魔法のことば」)

美しい絵が添えられたこの芸術的な絵本、ぜひ声に出して読むことをお勧めします。おまじないのように繰り返して読んでいくうちに、歩きまわる「歌」の姿が見えてくるかも知れませんよ！

「おれは歌だ おれはここを歩く アメリカ・インディアンの詩」金関寿夫訳、秋野亥左年絵／福音館書店
「魔法のことば エスキモーに伝わる詩」金関寿夫訳、柚木沙弥郎絵／福音館書店

(音楽教育講座)

5歳の誕生日に自転車を買ってもらったくまたくん、早速、家の前の道路で練習を始めます。「すると、きゆうにセがたかくなったようなきがしました。からだが、じめんからはなれたところにういているみたいです。」その日の夜、寝る前にもう一度、玄関先の自転車を見にいきます。分身にも思えるようになった自転車をです。次の日は、お母さんに見てもらっての練習です。ペダルを踏むと、ふらふらしながらも自転車は走り出します。「ママ、むこうのほうにたってて、お母さんとの距離が開くに従い、ふらふらは消えていきます。不安定にして安定したものとしての自転車、そのペダルをこぎつつけることから、自転車に乗っている自分を見つめるもう一人の自分が生まれます。自転車に乗れたその日を、忘れられない思い出の日に行っているのは、その日が自分を外から見る、もう一人の自分に出会えた日だからなのです。わたなべしげお作・おおともやすお絵『ぼくじてんしゃにのれるんだ』(あかね書房)は、自転車に乗れたくまたくんの思い出の日を伝えています。



舟崎靖子作・渡辺洋二絵『やい トカゲ』(あかね書房)は、「東町こうえんにやきゆうにいくよ。」と友だちが誘いにきても、行くことのできない「ぼく」に始まります。「ぼく」の自転車が、「手じなみたいに、まひるのどうろからきえてしまった。」のです。「ぼくのいえのとなりのはらっぱをおひさまがあかるくてらしている。・・・まるで学げい会のぶたいみたいだ。しょうめいにてらされただれもいないぶたいみたいだ。」自転車に乗って遊べない自分を、主役のいない舞台として思い描くのです。「やい、じてんしゃをなくしていいきみだぞ。」トカゲの目がそう言っているように「ぼく」には思えます。トカゲ目がけてろう石を投げつけます。石の当たったトカゲは、尻尾を残して

いなくなります。

「サクラの花がいちばんきれいにさいた日、・・・あの日も、ぼくはじてんしゃにのっていた。ザリガニをつりにいった日、・・・あの日もぼくはじてんしゃにのっていた。」いつも「ぼく」と一緒だった「ぼく」の自転車が見つかります。いつかのトカゲが、石の上から、『見るよ!』と いったようによこ目でぼくを見ています。『見るよ!』ぼくもじてんしゃのベルをならします。「やい トカゲ、せっかくはえたしっぱなくすなよ。」自転車にまた乗ることのできる高揚した気分、と同時に、腹立ちまぎれに石を投げつけた自分に対する反省が、乱暴な口調のその影からのぞいています。自転車に乗れなかったあの時の自分、自転車に乗ることのできるいまの自分、トカゲとの「対話」が「二人の」自分との対話なのは言うまでもないのです。

自転車に乗った父と娘が、干潟を走っていきます。父はボートを漕ぎ、海へと乗り出します。その日以来、娘は父を待ちつづけます。「夏が去り 冬が去る 少女の車輪と 季節はめぐる。」マイケル・デュドク・ドゥ・ヴィット作・絵・うちだややこ訳『岸辺のふたり』(くもん出版)には、過ぎていく直線的時間と巡り来る円環的時間の重なり合いが、少女のこぐ自転車によって示されています。娘は、「やがて かけがえのない人のぬくもりにふれる」のです。真っすぐに伸びた土手を父と娘が自転車で行く、恋人のこぐ自転車の後ろに乗った娘が行く、「彼とふたりでこぎだした 自転車に こどもたちがのっている」は、それを象徴するものに他なりません。「父は 帰ってこなかった、父だけは 帰ってこなかった。」が繰り返されます。強調されているのは父であること、そこから母であればどうなのかとの問い掛けをしたくなります。見えているのは、父と母の象徴するもの、直線的時間と円環的時間の違いに係わる問い掛けが教えてくれる答えなのです。



左側のページすべてが、額に入った写真のようになっていきます。思い出が強調されたものとなっているのです。父との思い出のなか自転車をこぐ、そして、いま年をとり、昔、夫と子どもとこいでいた自転車を振り返る。重なり合う時間のその中に、いつも一緒だった自転車が見えているのです。

「ぼくじてんしゃにのれるんだ」わたなべしげお作・おおともやすお絵／あかね書房

「やい トカゲ」舟崎靖子作・渡辺洋二絵／あかね書房

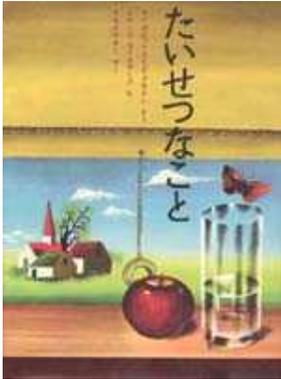
「岸辺のふたり」マイケル・デュドク・ドゥ・ヴィット作・絵・うちだややこ訳／くもん出版

(英語教育講座)

たいせつなこと

齋藤 広大

「コオロギは しろい トンと とんで ピョンと はねて チリリリ ないて なつ の よるを ひとしきり
うたいあげる でも コオロギにとって たいせつなのは しろい と いうこと」



この絵本はこんな文章から始まります。ページをめくった後、私は考え込んでしまいました。コオロギにとって大切なことが、なぜ “ しろいということ ” なのだろう。どうして、季節感を感じさせるあの歌声ではないのだろうと。コオロギと言えば、誰もが秋に聞くチリリリという独特の羽音を想像します。しかし、よく考えてみれば、その歌声はコオロギにとって生きるための営みの一部でしかないのです。コオロギは夜行性の昆虫です。暗い闇の中を活発に行動するには、“ しろいということ ” が大切なのがわかるのです。読み進めていくと、こんな文章に出会います。

「くつは あしを つつむもの あるくときには いた くつは よるには ぬいで
しまい ぬいだ くつには ほんのり ぬくもりが のこっている でも くつに
とって たいせつなのは あしを つつんでくれる と いうこと」

その通りと私は感じました。靴屋さんを覗くと、なんと多くの種類の靴が並んでいることでしょう。さまざまな色やデザイン。新しい靴を買いに行くと心が躍ります。どんなにオシャレな靴を選んでも、履き心地を確かめない人はいないと思います。靴にとって大切なのは、“ あしを つつんでくれるということ ” だからです。

これを読んだ時、これまでさまざまな学校で活動を共にしてきた中学生の顔が浮かんできたのです。くせ毛が嫌で隠そうとする生徒。背が大きすぎることを気にして、わざと猫背で生活する生徒。考えていることが周りとは違うことに自信が持てない生徒。できない自分を周りとは比べてしまう生徒。私が共にしてきた中学生は、何かしらの悩みを抱えながら生活していたように思います。

他人の良いところにばかり目がいってしまう生徒を多く見てきました。しかし、それを見つけられるのはすばらしいことだと思うのです。他を認めることができるのは、生きていく中で大切なことのひとつだからです。だからこそ、自分と向き合う生徒達にこの絵本の最終ページの言葉を贈りたいのです。

「あなたは あなた あかちゃんだった あなたは からだと ころを ふくらませ ちいさな いちにんま
えに なりました そして さらに あらゆることを あじわって おおきな おとこのひとや おんなのひとに
なるのでしょう でも あなたに とって たいせつなのは あなたが あなたで あること」

自分のことほど分からないものはありません。生徒達はこれから多くの素敵な出会いの中でどんどん成長していきます。ただ、焦らないでほしい。じっくり自分と向き合いながら、自分を見つけてほしい。そして、自分の良さをしっかりと発見してほしいのです。そんな思いで、この『たいせつなこと』という絵本を紹介させていただきました。

「たいせつなこと」マーガレット・ワイズ・ブラウン作・レナード・ワイスガード絵・

うちだややこ訳ノフレーベル館

(附属中学校教諭)

思い込みから自由でいることの大切さを教えてくれるこの一冊

オルガ・ルカイコ文・絵 / こだましおり訳『おおかみのおいしゃさん』(岩波書店)

奈良 友梨恵

具合の悪い子うさぎのマルクを連れて、おかあさんうさぎがお医者さんのところへ出かけます。もぐらのお医者さんが出した処方箋は、「土にもぐって トンネルを ほることだわな」、犬は、「ほねを 1日3かい かじればよらしい」、鳥は、「空をとぶようにと、ピイピイ うるさく」、猫は、「のねずみのパテや ねずみのタルトほど からだにいいものは ないんだがニャア」、魚は、「ずーっと 水のなかに もぐったまま およぐこと」でした。



そこにやって来たふくろうは、おおかみのお医者さんを紹介しします。おかあさんは、「おおかみは こうさぎを たべる わるいやつですよ」と言いますが、ふくろうは構うことなくおおかみを呼んでしまいます。「おねがいです。この子を たべないでください!」と懇願するおかあさんに、おおかみは大笑いしながら、「ぼうや、どうおもうかね?わたしが ぼうやを たべると おもうかい?」

「マルク、にげるのよ!」こわくてたまらないおかあさんは、顔を覆い、繁みに向かって駆け出します。振り返ると、マルクがいません。怖いのを我慢して、おおかみの家に行きます。窓からのぞいてみると、本の読み聞かせをするおおかみの声が聞こえてきます。「…こうして かしこい のうさぎの セグカロは、マルキロッソという うぬぼれやの チーターを 村から おいだしました。」いとこのうさぎの活躍にマルクは得意顔です。「ほらね、せんせい。のうさぎは かしこいんだよ!」

「なるほど。それなら、おおかみは みんな わるいやつで、のうさぎは みんな かしこいんだと おもうかね?」おおかみのその問い掛けに、マルクは考え込みます。マルクが窓の外の母親に気づきます。親子を椅子に座らせ、マルクを診察し、おおかみは医者務めを果たしました。翌朝、おかあさんは、泊めてくれたおおかみにお礼を言い、マルクと共に家に帰ります。

自分の感覚や判断は大事にすべきものです。しかし、固定観念や思い込みから物事を判断したり、決め付けたりすると、真実を見落としてしまうことがあります。凝り固まった考えから自由でいることの難しさ、凝り固まった考えになってしまっている自分を振り返ることの大切さを教えてくれる一冊です。

(社会科教育専攻3年)

新刊紹介

こみねゆら作・絵『にんぎょうげきだん』(白泉社)

人形劇を演じながら旅をつづける劇団の物語です。演目の一つが「こえをなくした おんなのこ」、声の出ない女の子に小さな花が、「わたしの はなびらをたべて」と声をかけます。花びらを口に入れると、きれいな歌声が出てくるのです。「うたごえのとどいたさきには ちいさなおはなが ぼつんぼつんと さいてゆきました。」これは舞台の内、「にんぎょうげきだんが さってしまった のはらに、ぼつり ぼつりと ちいさなおはなが さいてゆきました。」これは舞台の外です。内と外の境が溶けて一つになるのです。

疲れた足で野原に行く劇団の前に、一軒の家が見えます。「ドアをたたくと、むすめさんがでてきました。」出てきた娘さんが、一瞬、「こえをなくした おんなのこ」と重なり合います。夢と現実、二つの世界が交差する印象によってもたらされるものです。しかし、大きさの違いは明らかです。人形劇を演じるのが小さな人形だということ、人形が人形を使って人形劇を上演することを改めて知らされるのです。



娘さんとおばあさんの前で演じたのは、「こえをなくした おんなのこ」です。演じるその舞台裏が見えています。舞台裏という現実、しかし、そこさえも舞台の一部に思えてきます。「みんなひさしぶりに ふるさとのゆめをみました。」人形が見るその夢のなかに旅をつづける劇団があり、劇団の演じる人形劇があるように思えてくるのです。「またらいねん、おばあさんとむすめさんに あいにきます。」劇団は旅をつづけます。

今度は夜の動物のための夜の上演、演目は「ちいさな おどりこ」です。ターンがうまくできない踊り子に、「みているよ。わたしたちずっと みているよ」と星が語りかけます。すると「くるくる たっ くるくる とーん」、ターンができるようになるのです。舞台は満天の星空です。野原にも星がまたたき始めます。ここには、舞台の内と外に咲く花と同じ形の繰り返しがあります。揺れる境目がつくり出されているのです。

人形劇団が縁舞台の中にあることを扉絵が示しています。それによって、旅をする人形劇団そのものが劇になっている二重構造がわかります。外枠の付けられたページがそれを更に明確にしています。タイトルに与えられた二重の意味、「にんぎょうげきだん」は「人形劇を演じる劇団」なのか、「人形の劇団」なのかとも一つです。内と外とが揺らぐ奇妙な感覚は、そこから生まれ出ているのです。

(藤田 博)

発行:宮城教育大学附属図書館